はたらく女性の中央集会 IN 長野　　2023 年 10 月 8 日

教室に残る満蒙開拓の“現在（いま）”

―中国残留日本人の孫たちと学んで来た「満洲」・戦争―

飯島春光

【経歴】　1953 年生まれ　1971 年　長野高校卒　　1975 年早稲田大学政治経済学部卒
長野県内中学校社会科教師として 41 年間勤務
現在：長野県歴史教育者協議会副会長　　NPO 法人松代大本営平和祈念館理事　ほか

【著書・共著】
○「ひいばあちゃんは中国にお墓をつくった」（かもがわ出版）
○「戦争遺跡に学ぶ」岩波ジュニア新書　　○「あたらしい歴史教育」４　地域史に学ぶ（大月書店）
○「ぼくらの街にも戦争があった」○「戦争を掘る」（長野県歴教協編）
○　松代大本営と崔小岩　○ガイドブック松代大本営○「フィールドワーク松代大本営」ほか

【論文・実践報告】（篠ノ井西中学校での実践報告のみ掲載）
○「生き方をつくる『日本とアジアの歴史と今』の学習」（2003 年）
○「地域の戦没者調査が語るもの」（2004 年）○「戦後 60 年を子どもたちとどう語り合ったか」（2005 年）
○「身近な人々の体験を授業に＝いのちを受け継ぐ歴史学習＝」（2007 年）
○「地理で学ぶ『日本と中国の歴史と今』（2008 年）○「生きる力を育てる歴史学習」（2009 年）
○「生きていてくれてありがとう」○「中国帰国生徒を支え　いのちを受け継ぐ歴史学習」（2010 年）
○「孫たちと綴る満州・戦争」（2011 年）○「M恵ちゃん学校へ行こう」（2012 年）
○「中国にお墓をつくったひいおばあちゃん」（2013 年）○「君は満州へ行くか」（2014・15・16・17・18 年）

１．　旧西ドイツ大統領ヴァイツゼッカーの演説（1985 年）に学ぶ

「歴史を変えたり無かったりすることはできない。過去に目を閉ざす者は現在に対しても盲目になる。非人間的行為を心に刻もうとしないものは、また同じ危険に陥るのだ」　⇒「前事不忘　後事之師」

「故郷を追われ、隷属に陥った原因は、戦いが終わったところにあるのではありません。戦いが始まったところ、戦いへと通じる暴力支配が開始されたところにこそ原因があるのです。１９４５年５月８日（ドイツの無条件降伏）と１９３３年１月３０日（ナチ政権の成立）を切り離すことは許されないのです。」

２．　今につながる「満州移民」の歴史　国策としての「満州移民」

① 全国最多の「満州移民」（約３万３千人）を送出した長野県
　長野県内すべての市町村　から「満蒙開拓団」を送出した
　長野県内すべての小学校（国民学校）高等科で「満蒙開拓青少年義勇軍」志願を勧めた
② 「満州移民」の事実が知られていなかった
③ 学校の実態・・・教師自身はどう学んできたか　　どう教えてきたか
　教わらなかった歴史　　学ばなかった歴史　　教えなかった歴史
④ 敗戦の混乱の中で、中国に「残留」を余儀なくされた人々
　長野県下約 300 人の帰国者の背景に、1 万人以上の 2 世～5 世がいる。　全国では 10 万人以上
　3 世、4 世たちはどんな悩みを抱えているか

３．　2000 年　篠ノ井西中学校で・・・・・何があったか

激烈ないじめ、心ない言葉　「中国へ帰れ」「日本人をなめるなよ」
何が問題だったか　　転入生の心細さに寄り添えない生徒　　転入生への差別（中国蔑視）
背景を教えられていない生徒たち・・歴史への無知

４．　篠ノ井西中学校で取り組んできたこと

（1）「満州移民」に焦点を当てた学年ぐるみの平和学習（総合的学習）

（2）この学習を通じて、育てたかったこと

〇助けてくれた中国人への感謝と自分のルーツへの誇り・・・・堂々と生きよ！

〇助けてくれた中国人への感謝と敬意・・・草の根の日中友好・交流

〇戦争の時代を生きてきた家族、繋がってきた自分の命

◎学習を通じて、家族の歴史を知らしめる

中国に由来する生徒本人だけでなく、保護者にも家族の歴史を知らせる意味がある。

家族の歴史の聞き取り、学習を通じて、アイデンティティの確立に繋げる。

（3）学習の流れ　「生き方を考える『日本とアジアの今』の学習」

①「日本と中国の今と歴史」１ｈ　◇現在の中国の様子。◇日本は中国に何をしたか
（●訪中実写映像　●ＮＨＫ「市民と戦争」）

②「行け、満州へ」２ｈ
◇「満州」に渡った人は何をし、どうなったか。◇中国の人々はどうなったか。日本人や開拓団をどうみていたか。
（●現地農民、研究者からの聞き取り資料　●「プロジェクトＸ」奇跡の再会劇・大地の子を捜して）

③「満蒙開拓青少年義勇軍はどのように送られ、どうなったか」２ｈ　（●アニメ「蒼い記憶」）

④日本に帰国してきている人々の思い、かかえる問題・悩みは何か」１ｈ
（●ＳＢＣスペシャル「二つの祖国に生きて・中国からの帰国者たちは今」●資料「更級郷の人々」）

５．戦争の歴史を学ぶ　明治以来150年の中で戦争をとらえる

1873年徴兵令　1874年台湾出兵　1875年江華島事件　1894年日清戦争　1899年北清事変

1904年日露戦争　1914年第一次世界大戦　1918シベリア出兵　1927山東出兵

1931年満州事変　1937年日中戦争　1941年太平洋戦争（アジア・太平洋戦争）⟹⟹1945年　敗戦

☆20世紀は「戦争の世紀」　日本はどこの国と戦争をしたのか。

★戦争で日本人310万人が死んだ（この中に台湾人、朝鮮人　計5万人も含まれる）

★反対に、日本軍はアジア２０００万人を殺した。　★特に被害を与えた相手国は？

６．「満州移民」の歴史を学ぶ　「満洲国」建国（１９３２．３）

現地の支配のために、日本人を送り込んでいった（終戦時１５５万人）。

開拓団・義勇隊２７万人（長野県出身者１０５団、３万３千人・・全国１位）

① 1932（昭和７）年２月、関東軍「日本人移民案要綱」作成（１５年間で１０万戸の移民計画）…政府案の骨子となる。・・屯田兵としての満蒙開拓団の誕生へ。

② 二・二六事件（1936.2.26）で満州移民に批判的だった人々が暗殺される。

③ 1932年10月　初めての武装移民団・弥栄村開拓団の送出。
現地人の抵抗に遭い、佳木斯で４ヶ月くぎづけ。入植予定地の永豊鎮に向けて出発できたのは翌年２月。

④ 1933年２月４日～　長野県で「二・四事件」起こる　労働者608人（内教員230人検挙される）

⑤ 1936年８月、日本政府「満州農業移民政策」作成（以後２０年間に100万戸500万人を移民させる）。
各自治体に割り当て。　都道府県、市町村が先頭に立って募集を開始。

⑥　壮年の開拓団は思うように動員できず、少年を動員。
1938（昭和13）年１月「満蒙開拓青少年義勇軍」全国募集開始…高等科卒14歳で志願。

★「満州」へ行った人はどうなったか

全国27万人の開拓団　うち８万人以上が死亡　長野県33000人の開拓団　約半数が死亡。

満州最大の悲劇「佐渡開拓団跡事件」　その中に更級郷・埴科郷の人々がいた

高社郷、更級郷、埴科郷など３千人余が集結。１１４１人が死んでいる。

日本の敗戦を知らない人々が不時着したソ連軍の飛行機を焼き払い、包囲された。

８月２５日高社郷は「集団自決」。２７日　更級郷、埴科郷などがソ連軍の攻撃にさらされた。

●高社郷　在団者６４１人　　※在団者はすべて 1945 年 8 月 9 日時点の数

Ａ　引き揚げ 55 名　　Ｂ　死亡 568 名（自決 539 名）（死亡率 88.6%）

Ｃ　不明７・残留 11（孤児３）

（☆男性の出征者　65 名のうち　復員 62 名　戦死 2 名　シベリアで死亡１名

●更級郷　在団者４０７人

Ａ　引き揚げ 19 名　Ｂ　死亡 383 名（佐渡開拓団跡で 337 名）（死亡率 94.1%）

Ｃ　未帰還　5 名　（☆男性の出征者　64 名のうち　　復員 43 名、死亡 21 名）

●埴科郷　在団者２２９人（男性１９名　女性・子ども２１０名）

Ａ　引き揚げ 17 名　Ｂ　死亡 199 名（佐渡開拓団跡で 171 名）（死亡率 86.9%）

Ｃ　未帰還・不明 13 名　（男　10 歳、6 歳、6 歳、5 歳、3 歳、2 歳、2 歳）

（女　29 歳、21 歳、10 歳、8 歳、8 歳、5 歳　）

☆男性の出征者 59 名のうち　復員 48 名　死亡 11 名　☆奉仕隊 21 名の内、死亡 5 名

●人々はなぜ死ななければならなかったのか。　カギをにぎる松代大本営

※　ポツダム宣言【7 月 26 日】を黙殺　→　戦争が続行された

※　ソ連の参戦（米英ソのヤルタ協定でドイツ降伏 3 か月後の参戦が決定されていた）

ドイツは 5 月 8 日に降伏　　8 月 8 日ソ連が宣戦布告

※　開拓団を置き去りにして撤退した関東軍（日本軍）

「満州」の 4 分の 3 がソ連参戦の前にすでに放棄されていた。

※　逃避行の中で息絶えた人、強制集団死（集団自決）した人、収容所で死亡した人

※　中国人に助けられた人々　数千人が、「中国残留日本人」として、中国で戦後を生きてきた。

※　敗戦の引き延ばしによる膨大な数の死者

戦没者の 8 割は最後の 2 年間で　　10 万人以上の死者・・東京大空襲　沖縄戦　広島・長崎　満洲

７．　人々の戦後　　中国でどのように助けられ　生きてきたか

戦後 36 年間　、48 年間、人々は日本政府から放置されてきた

1945 年　敗戦　　1972 年　日中国交回復　　1978 年　日中平和友好条約

1981 年～　「残留孤児」の肉親捜し　　第一の帰国ラッシュ

1993 年　　12 人の「残留婦人」の強行帰国　　第二の帰国ラッシュ

※今につながる「満州移民」の歴史

長野県下約 300 人の帰国者の背景に、1 万人以上の 2 世～5 世がいる。　全国では 10 万人以上

８．　今私たちは　「満州移民」・戦争の歴史をどう学び、どんな未来をつくっていくのか。

★　戦争・国策が民衆にもたらしたものは何か

★　軍隊は何を守ったのか　守らなかったのか

★　日本と中国の戦争の歴史　＆　「満州移民」の歴史を学ぶ

★　中国残留日本人と 2 世、3 世、4 世・・の抱える悩みに寄り添い、ともに生きる多文化共生社会を創る

★　ルーツを胸に、堂々と生きる卒業生たちの姿に学ぶ

新聞づくり　　英語弁論　　文化祭での発表　　スクラップコンクール　　成人式での意見発表

★　ゼミ論「満蒙開拓歴史学習の果たす役割」をまとめた女子大生

「歴史に学び　今を生き　未来をつくる」＝「前事不忘　後事之師」

社説

共に学んで橋を架ける

満蒙開拓の歴史

中国では「日本人、おまえは鬼の子だ」と言われた。日本では「中国人！」と言葉を投げ付けられた。

長野市の篠ノ井西中学校3年、北原康輝君の体験である。

中国人の血が流れていることが嫌になり、自分自身と家族を恨んでいた。

昨年、転機が訪れた。社会科の飯島春光先生に勧められ、祖父から家族の歴史を聞いた。

曽祖母の北原さきさんは1936（昭和11）年、飯山から旧満州（中国東北部）に渡った満蒙開拓団の一員だった。

夫は召集され硫黄島で戦死した。そして45年の敗戦。逃避行と過酷な収容所生活が続いた。さきさんは米を炊くと、子どもに焦げた部分を与え、うまく炊けた米は他の家族に回したという。

やがて3人の娘のうち2人を中国人に預け、1人を連れて別の中国人と再婚した。戦後、帰国は実現せず、中国で亡くなった。

ルーツへの誇りを

さきさんの話を聞いた北原君は「満州国と僕」と題して作文を書き、9月の英語スピーチ大会で発表した。歴史を知ったうえで自分のルーツに誇りを持って生きる。そんな覚悟がにじむ内容だ。

日本で生きる道を選んだ祖父母や、両親、兄弟ら一族は長野市篠ノ井で暮らす。北原君と同じように中国残留日本人4世に当たる世代が各地の学校で学ぶ。

2000年に篠ノ井西中に赴任した飯島さんは、帰国生徒がいじめの標的になっている現実にぶつかった。満蒙開拓で余儀なくされた歴史を、本人も同級生も知らないことが深い溝を生んでいた。

飯島さんは帰国生徒と一緒に家族への聞き取りを始めた。それを元に生徒に新聞を作ってもらった。一人一人の人生と満蒙開拓の歴史を重ね合わせ、命や平和の尊さ、日中の交流や未来なども考える授業の実践だ。

満蒙開拓は当時の国策として遂行された。全国から約27万人が渡り、長野県からは県別で最多の約3万3000人の開拓団員と、約6600人の満蒙開拓青少年義勇軍を送り出した。

旧ソ連軍の侵攻や集団自決などで多数の犠牲を出した。取り残された開拓団員は残留婦人や残留孤児として苦難の人生を歩んだ。

戦争の教訓を刻む身近な歴史である。にもかかわらず多くの人が学校で学んだ記憶がないのではないか。教師自身も同様だろう。

中学の教科書に掲載されるようになったのは近年のこと。高校でも学ぶ機会はほとんどない。日本史Bの教科書、例えば山川出版社には本文に記述がない。

満蒙開拓は送り出した側の人もいて地域に複雑な意見がある。「教えにくい」と二の足を踏む先生もいよう。先生が多忙さを極める日常の壁は厚い。

2013年、下伊那郡阿智村に満蒙開拓記念館が開館したのと前後して新たな動きが出てきた。

同館は加害と被害両面から満蒙開拓に光を当てている。8月には飯田下伊那の先生の初任者研修が開かれた。「来館する先生は着実に増えています」。事務局長の三沢亜紀さんの実感だ。

三沢さんはこう思う。若い先生はゼロからの出発。過去に縛られずに教えられる。近現代史は政治的なスタンスを問われて及び腰になりがちだが、生徒と「一緒に考えていこう」と踏み出せるよういざなっていきたい、と。

県同和教育推進協議会は昨年改訂した副読本「あけぼの　人間に光あれ」に満蒙開拓を初めて特集した。10ページにわたって元開拓団員の証言、帰国者の体験などを紹介している。

中心になった永池隆先生（現岡谷西部中校長）は「出自を明らかにできず、自分自身を解放できないなど共通する問題がある」と人権・同和教育の柱に位置付ける。

一人一人に寄り添う

篠ノ井西中には中国残留日本人3世、4世の生徒が13人通学している。一人一人に寄り添って家族の歴史に学びつつ、同級生に理解が広がる教育を実践している。

日本語が十分に理解できない生徒をサポートするため、中国人の支援員らがいる特別学級の「国際室」も備えている。

飯島さんは「満州で助けられた命をしっかり引き継ぎ、自分の人生を堂々と歩めと教えている。日本人の命を助けた中国人への敬意も育てたい」とする。

北原君は作文をこんな言葉で締めくくっている。

〈僕は将来、僕の子どもたちに家族の歴史をきちんと話し、日本と中国の架け橋になりたい〉

篠ノ井西中のように支援態勢が整っていない学校では、ルーツが中国にもあることを隠す生徒はいないか。共に学んで歴史を知れば深い溝に橋を架けられる。見て見ぬふりはその可能性を摘む。

あすへのとびら

【資料】満州移民・満蒙開拓団の歴史的経過（概略）

１９３１年	柳条湖事件（満州事変始まる）
１９３２年	「満州国」建国宣言。第一次武装移民始まる。 関東軍の武力による土地取り上げ進められる。 長野県では、「満州愛国信濃村」建設
１９３３年	国際連盟総会で「満州国」不承認（４２：１）。日本、国際連盟を脱退。
１９３４年	「土龍山事件」起きる。飯塚小隊全滅。報復として三光作戦。４０平方km掃討。 饒河少年隊、東安省に入植。（１０月）
１９３５年	「満州拓殖公社」設立。「満州国」名義で買収進める。
１９３６年	「２０カ年１００万戸移民計画」（８月）。長野県では既に３月に「満州信濃村建設趣意書」と同建設計画を拓務省へ提出。 →　黒台信濃村で具体的に実現し、国策より先に進める。
１９３８年	「満蒙開拓青少年義勇軍」全国募集開始（１月）・・・「動くトーチカ」として、ソ連との国境付近に配置され、戦闘訓練を受けていく。 長野県では、信濃教育会を挙げて「興亜教育」が進められ、教師による家庭訪問で、積極的に「義勇軍」志願を奨励。
１９４５年	徴兵年齢の１８歳への引き下げにより、「義勇軍」からの召集続出。「開拓団」からの現地根こそぎ召集始まる。（関東軍は南方へ） ソ連参戦により「開拓団」「義勇軍」の地獄の逃避行始まる（８月９日）

１．満州国建国（１９３２．３）、開拓団送出

現地の支配のために、日本人を送り込んでいった（終戦時１５５万人）。開拓団・義勇隊２７万人（長野県出身者１０５団、３万３千人・・全国１位）

①１９３２年２月、関東軍「日本人移民案要綱」作成（１５年間で１０万戸の移民計画）…政府案の骨子となる。・・屯田兵としての満蒙開拓団の誕生へ。

②二・二六事件で満州移民に批判的だった人々が暗殺される。

（ア）１９３２年１０月　初めての武装移民団・弥栄村開拓団の送出。だが、現地人の抵抗に遭い、佳木斯で４ヶ月くぎづけ。佳木斯から入植予定地の永豊鎮に向けて出発できたのは翌年２月。

（イ）３６年８月、日本政府「満州農業移民政策」（以後の２０年間に１００万戸を移民させる）を作成。都道府県、市町村が先頭に立って、各自治体に割り当て。

③壮年の開拓団は思うように動員できず、少年を動員。…「満州開拓青少年義勇軍」の誕生。…高等科卒（１４歳）で団員になった。

１９３７年７月　長野県が「満州開拓青少年移民」募集。「満州開拓青少年移民実施要項」決定。以後、信濃教育会が送出（割り当て）に尽力、その先頭に立った。「興亜教育」を進め、教師が家庭訪問を繰り返し、団員を募った。家族の反対を押し切って応募していった少年も多い。

★「満蒙開拓青少年義勇軍」の生活…茨城県内原訓練所で２ヶ月の訓練。「満州国」での３年の現地訓練。その後、開拓地に入植（現地では、「・・・義勇隊」と呼ばれた）。任務は、自らも農耕をしながら、関東軍を補完し、開拓団を守る。開拓団も「義勇隊」もソ連との国境地帯に配備された。

隊長をはじめ、指導者は現役の教師。

２．開拓団と中国人

①　土地取り上げ・・・はじめは関東軍が強制買収をしていった。
現地の激しい抵抗・・土龍山事件（１９３４年）で関東軍飯塚小隊全滅。

②　「満州国」（満州拓殖公社：１９３６年１月設立…現地の人々は「満州国」を「偽満州国」と呼び、日本と一体のものと理解していた）による土地買い上げ方式に転換。価格は実際の１０分の１程度かそれ以下。地図上で買収地を設定、一方的に通告。農民が土地権利証の譲渡をためらっていると、警察が来て脅して買収。1941 年までに２０００万ｈａを獲得。（依蘭県での例：1938 年、関東軍が依蘭城から土

城子まで４５キロを焼き払って、中国人を追い出し、1939 年春、日本開拓団が入植。）

③　土地を取られた中国農民は、移住したり、その地にそのまま住み、日本人の小作人や苦力になって、苦しい生活を余儀なくされた。（１９４２年当時、弥栄村では、日本人の耕作面積中、２６．５％だけが自耕地。７３．５％は現地農民が耕す小作地。）

④　中国人は、開拓団と軍を区別して見ていたが、中国人にとって侵略者であることに違いはなかった。

３．<u>敗戦・逃避行…関東軍による棄民</u>

①1945 年８月９日未明ソ連軍が侵攻。（ヤルタ会談でドイツ降伏 2～3 ヶ月後のソ連の対日参戦決定）

②　関東軍の主力は南方に移動していたが、ソ連に察知させないために、開拓団はいっさい動かさず、４５年になってもなお、開拓団を送出していた（阿智村開拓団は１９４５年５月に「渡満」）。

開拓団には「国辺の守り、関東軍は盤石である。」と宣伝し（４５年８月２日）、そのころ軍の撤退はほぼ完了。新京では軍家族の南下準備が始まっていた。

③　関東軍の移動にともなう兵力の減少を、開拓団の男を１８歳から４５歳まで「根こそぎ召集」し、まかなった。一般の開拓団に残ったのは、婦女子と老人男性、一部幹部のみということになった。

④　青年義勇隊に対しても徴兵年齢引き下げで召集した。（２６９名の北村中隊で、残留は７０人程度）

⑤　残った関東軍もいち早く逃げ、国境付近に残された開拓団、義勇隊の決死の逃避行が始まった。

・　「東安駅爆破事件」では、関東軍が弾薬庫を爆破し、数百人の犠牲者を出した。
・　橋を関東軍が爆破したため、川を渡れない開拓団員たちが大勢死んだ。
・　集団自死していった開拓団も多い。…「佐渡開拓団跡」で、高社郷が集団自死。更級郷、埴科郷の人々と合わせて千数百人が死亡。中には集団自決をやめよと主張した人もいた（高社郷、下田讃治さん）。

⑥　大本営の方針…大本営参謀五課（ソ連担当）朝枝繁春の説明…（8/9 発電による勅命）

ⅰ　関東軍総司令官は米ソ対立抗争の国際情勢をつくるよう作戦指導すること。

ⅱ　帝国の再建復興を考え、なるべく多くの日本人を大陸の一角に残置するよう計画すること。日本人の国籍はどのように変更してもいい。

⑦　定住化計画…

ⅰ　日本政府は８月１４日の緊急電報で「居留民の現地定着」を山田乙三満州国特命全権大使（関東軍総司令官）に指令し、満州進攻軍フェデンコ中将（初代駐日ソ連大使）に伝達。

ⅱ　大本営参謀五課・朝枝繁春報告（1945.8.26）「在留邦人および武装解除後の軍人はソ連の庇護のもとに鮮満に土着せしめて生活を営むべくソ連側に依頼するを可とす」。…その結果、帰還希望者を３０万人と過小に推定し、在満日本人の引き揚げは中国本土の日本軍隊よりはるかに遅れた。

⑧　引き揚げの遅れによる膨大な死者。…１９４５－４６年にかけて死者約１９万人。その後３万人。ポツダム宣言受諾後に２１－２２万人が死んだことになる。開拓団関係８万人超。うち「自決」が１万人余。４５年秋には中国本土、台湾、南方からの引き揚げが博多、佐世保などに殺到していたが、「満州」からの第一陣出航は４６年５月１４日。同年１０月までに１０１万余、４８年８月までに約１０５万人が引き揚げ。４５年の冬を越せなかった死者が圧倒的多数。

４．<u>戦後の残留邦人…日本政府による棄民</u>

（長野県関係死者・行方不明者　約１万６千人）

★逃避行の中で、中国人に引き取られた子どもたち。養父母は「日本人」だということを隠して、いじめや不利益から守ろうとした。文化大革命の時には自分が迫害されても子どもを守った養父母も多い。一方で、事情を知っているまわりの中国人から「日本人」「日本鬼子」といじめられた例も少なくない。

★夫が現地召集されたまま消息が知れず、生きるために子どもを連れて、または当時まだ独身で、中国人と結婚した日本人女性も多い。日本人の夫と連絡が取れ、帰国してきている婦人もいる。

①　日中国交断絶により、戦後２７年間放置されてきた。<u>１９５３年には「戦時死亡宣告」により、戸籍からも抹消された。</u>山本慈昭さんらの尽力により８０年代に入ってやっと「残留孤児」の肉親探しが始ま

る。身元判明者に対して日本政府は、「孤児」本人夫婦と未成年の子どもの帰国旅費だけ支給。それ以外の成人あるいは既婚の家族の旅費は自力でまかなわなければならなかった。

② 敗戦時１３歳以上の「残留婦人等」は「自分の意思で中国に残った」として、放っておかれた。

③ １９９３年9月　１２人の「残留婦人」が自費で強行帰国。「私たちを祖国で死なせて下さい」と細川内閣に訴えた。　【身元保証人＝親族】という規定が廃止され、「孤児」以外も、身元引受人がいれば帰国できることになった。それをきっかけに、９０年代に帰国者が急増した。

④ ９４年「中国残留邦人等帰国促進・自立支援法」が成立。だが、国民年金支給額は一律２万２千円のみ。

５．中国帰国者とその家族はどんな問題をかかえてきたか。

Ｓさん「一番苦労したことは、住居と仕事」　　住居：２人の保証人が必要

仕事：社長さんにひたすら頭を下げてお願いした。ことば、習慣が違って、本当に苦労した。

自分も40年も中国にいて、日本語がなかなかスムーズに出て来なかった。

①生活費　　★きわめて少なかった年金額。・・・・日本で勤めた期間が短く、退職時の賃金も低いため。

「中国残留孤児」の生活保護受給率　６５．５％（２０００年厚生労働省調査）

中国に子を残している世帯　６７．２％（１９９９年　世帯状況調査）

★生活保護をもらうと家族と同居できず、中国への墓参りや養父母の病気見舞いに行った場合は、生活保護費から旅費が差し引かれるため、なかなか行くことができなかった。

②「中国残留孤児」国家賠償請求訴訟

★２００２年１２月２０日：６２９名が国家賠償請求訴訟を東京地裁に起こす。

以後、全国各地で２２１１名が提訴。「帰国孤児」約２５００名のうち、８７％が訴訟に参加した。

★２００７年１１月２８日：「改正中国残留邦人支援法」が国会の全会一致で成立。

国民年金満額６６０００円＋給付金８万円が支給されることになった。

★１０万人以上を数える二世、三世、四世は、このらち外。すでに二世の高齢化も進んでいるが・・・・。

③子どもたちの生きる力をどう保障していくか。

「しっかりした学力を身につけてほしい」　「中国の文化を忘れないでほしい」　（Ｓさん）

③　多文化社会を構成する重要なメンバーとしての帰国生徒たちに、生きる力をつけること。

中国の文化・言語を忘れることなく、日本で生きていく力をつけさせること。

同化教育でなく、中国人としても、日本人としても生きられる力をつけさせること。

（ア）日本人生徒たちに、帰国生徒たちの家族の歴史的背景をきちんと教えること。

当事者の帰国生徒にも、祖父母、曾祖父母が辿ってきた歴史をきちんと教え、自分のいのちの重みを考えさせたい。そのことが、いのちを受け継ぎ、未来に生きる力となるだろう。

（イ）お互いの文化を尊重し、共生していける人権感覚を育てること。

中国の生活文化も積極的に認め、交流していく機会を。

④　保護者の悩みや要求に応える学校体制の確立、地域の支え合い。

6. 今私たちは　「満州移民」・戦争の歴史をどう学び、どんな未来をつくっていくのか。

★日本と中国の戦争の歴史　　「満州移民」の歴史を学ぶ

★中国残留日本人・2世、3世、4世・・の抱える悩みに寄り添い、ともに生きる社会を創る

「歴史に学び　今を生き　未来をつくる」

＝「前事不忘　後事之師」